『中外日報』平成７年１月24日付（25257号）2-5面

震災関連記事のみの抜粋です

中外雑記

神社界

地震体験を語る

●楠木正成を祀る湊川神社（神戸市中央区）の吉田智朗宮司＝**写真［写真は省略］**＝は十七日朝、自宅で地震発生と同時に目を覚ました。まず掛け軸などのコレクションが入っている大きな段ボール箱が、いくつかベッドの上に落ちた。続いて反対側のタンスが倒れてきて段ボールに八の字形に覆いかぶさり、吉田宮司はベッドの上で身動きがとれない状態になった。しかし、この時吉田宮司は「驚きも恐れもなかった。ああ、これで死ぬんならそれでもいいんだと思った」という。しかし次の瞬間は家族への心配もあって「これではいかん」と思い直り、やっとの思いでベッドから抜け出た。幸い吉田宮司も、夫人もけがはなかった
▽湊川神社は他の中央区の神社に比べ、比較的被害が少なかった。これは本殿がコンクリート造りだったからと思われる。地震発生から神社に住んでいる吉田宮司のもとへ、十九日以降、郷里の山口県から救援物資が続々と届けられた。また、八人編成の医療団も湊川神社支援のために駆けつけ、崇敬者などけがをした人の治療にあたっている。これらは夫人のいとこで病院院長の柴田眼治氏の好意で実現したもので、神社を拠点に、近くの社寺へも緊急物資が運ばれ、吉田宮司の面目躍如たるところとなった。吉田宮司は日頃「かつえる（飢える）こと」を健康法としているだけあって、食事が少ないのは苦にならない。戦後は十日くらい風呂に入らない日もあって水不足も平気だった。しかし二十一日から水が出始めた時にはさすがに「なんという有り難い事」と感動だったという
▽また今回の地震は、去年十二月に就任したばかりの栃尾泰治郎権宮司も驚かせた。なんとか新年の行事を終えてほっとしていたところへの、まさしく驚天動地の出来事だったが、栃尾権宮司も地震発生から神社に泊まり続け、極短眠不休で救援物資の搬入や境内の安全確保、外部との連絡に活躍した。

臨黄

宗務本所有志が托鉢

●**妙心寺派**　宗務本所の若手職員有志が二十一日から、兵庫県南部地震被災者救援の托鉢を始めた。養心会有志が呼びかけたもので、約十人が賛同。宗務本所の執務時間中だが宗務当局も許可を与えた。二十七日まで毎日（午前十時～午後一時)､仕事の手の空いた六～七人ずつが交代で人通りの多い四条河原町に立ち、雲水姿で被災者救援を訴えている＝**写真［写真は省略］**
▽宗務本所は二十一日付で各教区、各寺院宛に被災者義援金の募金実施を通達した。各教区内寺院、檀信徒に被災者救援の趣旨を説明し、募金協力を要請するよう求めたもの。募金の送付先は宗務本所花園会本部
▽本所はこれに併せて、震災による物故者供養を各末寺に呼びかけている。本所でも朝課の折に供養を行なっており、前記通達には回向文が参考に付記されている
▽羽賀文圭総務部長、宮田正勝花園会本部長は二十日、兵庫教区宗務所のある姫路市の東光寺を訪れ、大西道裕宗務所長に見舞金百万円を伝達するとともに、地震の被害状況、地元における対策などを聞いた。両部長は二十三日にも再び東光寺を訪れ、ここを拠点に被災寺院調査に入った
▽神戸市内にある海清寺や祥福寺には既報の通り、本山職員四人が西宮から徒歩で見舞いと被害状況調査に訪れ

た。他に見舞いの品をもって駆けつけた会下も多かったようだが、二十一日には霊雲院の則竹秀南住職も西宮から兵庫区まで歩いて祥福寺を訪ねた由
▽兵庫教区は十九日に宗務支所長会を開き、被災寺院支援対策を協議、教区寺院百四十ヵ寺のうち、被害が少ない約百ヵ寺が義援金を拠出することを決めた。目標は千万円以上。本堂などが全・半壊した寺院に対する援助に充てる方針
▽二十三日現在、教区内寺院の被災状況はまだ正確には掴めていない。「被害が多かった第一部、第二部の状況は間もなくまとまるが、教区全寺院の被害が判明するのは月末頃になりそう」と大西所長は語っている。

被災者救済義援金呼び掛け

●東福寺派　兵庫県南部地震で一派では既報の茂松寺の他、西宮市の如意寺（峯山瑞源住職）で山門、鐘楼などが全壊、同じく積翠寺（丹羽演英住職）で本堂、庫裡が半壊した。寺族に関しては幸い死傷者はなかったが、檀信徒、恵日会員の被災状況は本山ではまだ掴みきれていない
▽宗務本院は二十日付で各教区宗務所長宛に被災者救済義援金の依頼状を送付した。本派第九教区の被災寺院、檀信徒、恵日会員並びに被災地域住民救援を宗務所を通じ各末寺に呼びかけたもの。一口千円（一口以上）で募財し、宗務本院で一括する。なお青木謙整宗務総長二十三日、西宮市に入り被災寺院を見舞った
▽大本山東福寺では重要文化財の十三重石塔最上部が損壊、落下し、修復が必要になっている。

一日に地震対策の臨宗

●南禅寺派　兵庫県南部地震では本派の約七％の寺院が程度の差はあれ何らかの被害を受けた。寺族の死傷者はなかったものの、檀信徒の被害の大きさがどの程度になるか、想像もつかない。被災寺院、被災者対策がこんごの大きな宗政課題になることは確実だ。大本山南禅寺からは二十三日、第六部・第七部宗務支所管内の約三十ヵ寺に見舞状と一律十万円の見舞金が送られたが、二月一日には早速、臨時宗議会を招集し、本派被災寺院支援対策と一般被災者に対する本派としての対応を協議することになった
▽これは虎山秀禅新宗務総長の就任、新内局の発足が月明けになるため。鈴木正澄法務部長、堀口宗信信徒部長ら四人が十八日から二十日まで三日間かけて神戸、明石両市内の一派寺院を見舞いに訪れ、被災状況を調査したが、その調査報告を踏まえ今後の対策を話し合う
▽二十一日付本欄で、「全壊」という目撃情報を伝えた楠寺・広厳寺（千葉猷道住職、神戸市兵庫区）だが、「誤報」であったことが確認できた。記者が二十一日、広厳寺を訪問して確かめたところでは、本堂や中庫裡など一部で屋根瓦が落ちている程度で、被害は比較的軽微。ただし、行政からの依頼を受けて中書院が遺体安置所として用いられていた。約三十体を安置しているとのことで、ちょうどその時も新たに遺体が運び込まれたところだった。建物の下敷きになってかなり傷んでいる亡骸も多く、千葉住職も「痛ましいことです」と表情を曇らせていた
▽なお、宗務本院が調査把握した一派末寺の被害状況は別項記事参照。

義援金五十万円を拠出

●仏通寺派　神田敬巌宗務総長の話によると、十七日早朝に起きた兵庫県南部地震の被災民救済のため、同派では五十万円の義援金を拠出することを決めたとのこと。

竜泉寺が大被害

●永源寺派　一派では神戸市内に末寺が二ヵ寺ある。ともに灘区内だが、山の手の方にある十善寺（尾山宜道住職）は地震の被害は鐘楼倒壊など比較的に軽微。しかし、国道２号線沿いで海岸部に近い竜泉寺（関俊英住職）は高槻にあった古い地蔵堂を移したという本堂が傾き、玄関の屋根が落ち、庫裡も内部が滅茶苦茶。伽藍は斜面に石垣を築いて建っているが、その石垣が崩れかけており危険な状態だ。周辺は建物の倒壊も多く、近くのゴム工場からのものか、異様な臭気も漂ってくる
▽関住職らは取りあえず危険を避けて、自家用車の中で生活をしている。「余震があるたびに、少しずつ石垣の石が落ちていく。私一人なら何とかなるが、母がいるので…」と困惑の様子。「復興といっても私の代でできるかどうか」と沈痛な表情だった。

天台

仏青も自主的に救援活動

●天台宗　宗務庁に設置された「兵庫県南部地震災害特別救援本部」(本部長＝杉谷義純総長、副本部長＝小林隆彰延暦寺執行）での救援活動が本格化している。対策本部では二十三日に対策会議を開き、今後の活動方針を打ち出した。二十日午後には、必要物資の調達に役立ててもらおうと「地球救援募金」から拠出した一千万円をＮＨＫに寄託している。一方、被災寺院向けに、崩落した寺の屋根にかぶせるためのビニールシートや、下着などの衣類、食糧、医薬、電池などを集めて輸送した。また、岡山・近畿・滋賀・京都の各教区の仏青メンバーもボランティアとして現地入りし、被災者の救援にあたっている。また、十八日に震災者のための慰霊法要が延暦寺で営まれたが、地震発生当時から震災犠牲者の数も増大しており、二十四日午後三時から、再度慰霊法要を営むことになった
▽現場の状況としては、神戸市では、能福寺（雲井世雄住職、兵庫区北逆瀬川）が近辺の人々の避難所になっており、「兵庫県南部地震災害特別救援本部」からの物資などが続々と到着、同寺がキーステーションとなって、到着した物資を兵庫仏青のメンバーが仕分けしているという。能福寺のほか、神戸市では理教院（勝山忠圓住職、兵庫区永沢町)、善光寺（高坂盛暢住職、兵庫区会下）が中心となって現地の避難所となり、活動している。仏青メンバーも各自自主的に救援活動を行なっている姿が見られる
▽震災が起きた当日に現地を視察した山田能裕社会部長によれば、烈震が襲った神戸市に二十二ヵ寺ある天台宗寺院の多くに、建物が傾いたり、瓦が落下するなどの被害が出ており、重要文化財の仏像が損壊した所もあるという。

総長不在の中、救助対策

▽杉谷義純総長は災害発生前に東京へ帰坊しており、交通事情のため帰山することができず、東京で公務をこなした後、やっと二十日夜に坂本の第二庁舎に帰り、二十四日朝から山積する庶務を切り回し、対策会議に入った。本部長の杉谷総長が不在というなかで、災害発生時の災害援助について、山田俊和総務部長、山田能裕社会部長の両部長がカン詰め状態で中心となって、東京の総長と連絡をとりつつ対応、見事な切り回しで、迅速に対処していた。地震発生時に直ちに現地に直行、帰山後は援助物資を集めてすぐに送り込むというこの処理は見事であった。山田俊和総務部長も、自坊の葬儀も他寺に頼んで全力で援助に全力を注いでいた。自坊の葬儀に当たっては、戒名をファクスで自坊とやりとりしているという。

寒行托鉢も救援募金に

▽恒例の延暦寺一山による寒行托鉢が二十日から始まったが、急遽、十七日の兵庫県南部地震のための地震救援募金に切り替えて、募金を募っており、かなりの成果を上げたようだ。二十日の初日には大津市坂本の生源寺を朝九

時に出発、小林隆彰執行が先頭に立ち、法螺貝を鳴らし、坂本、穴太方面を正午まで回った。托鉢は二十五日まで大津市域を回る予定。十七日の地震発生後すぐに現地に発ち、十九日早暁三時帰山した真嶋康祐副執行も同行していた。

叡山学院25日に救援托鉢

▽叡山学院(叡南覚範学院長、大津市坂本)でも、兵庫県南部地震のニュースが届くと、院生が集まり、取りあえず、物資を集めて、学院生と教師が二団が神戸に出発し、現地で救援活動している。また、学院としても二十五日に、救済の義援金を集めるための托鉢を実施する。また、学院生の平成七年度の入学についての対応は、震災などの影響で具体的な相談があれば、できるだけ考慮してゆこうという方針であるが、入学試験が三月ということでか、現在のところは問い合わせは来ていないようだ。

被災地に五百万円送る

●聖観音宗　総本山浅草寺(壬生台舜貫首)は二十日、兵庫県南部地震の被災地に対する義援金として五百万円を地元・台東区に寄託した。小岩井貫承執事長が台東区役所で飯村恵一区長にお金を手渡した。また、同日から境内に募金箱が設置され、約一ヵ月間にわたって募金活動が展開される。また、浅草寺のボーイスカウト「台東第七団」（大森和潮団長)は二十二日、境内で参拝客に募金を呼びかけた。メンバーの小学生四十五人が朝十時半から募金を行ない、収益は新聞社を通して被災地に送られることになっている。

真宗

二人一緒にお棺に…

●本願寺派　今回の阪神大震災では豊原大潤元総長をはじめ七人の寺族が犠牲になっているが、この中にはまだ生後六ヵ月の乳児とその母親が含まれている。震災後に火災が頻発した神戸市長田区に接する兵庫区中道通九丁目にある光明寺（山西宏昭住職）は本堂や境内の幼稚園の建物は残ったが寺族の居住する庫裡が全壊し、山西住職の長女の沼田宏美さん（三四）と孫の華奈ちゃん（六ヵ月）の二人が犠牲となった。宏美さんは十年前に妹の真理さんと一緒にアパレル関係の会社「モンテオベスト」を設立、年商十億を超えるまで成長を遂げた同社の社長。自宅は東京にあるが月の半分は本社のある神戸で過ごしており、この時も華奈ちゃんを連れて前日の十六日に里帰りしていた。倒壊した庫裡には一階に宏美さん母子、二階に山西住職、昭子坊守、義昭副住職とその夫人で妊娠中の節さんらが就寝しており、今回の震災に遭った。地震の直後、近くのマンションに住み同寺の幼稚園に勤務する昭子坊守の妹の松田清子さんが駆けつけた時には既に庫裡は倒壊して瓦礫の山と化していたが**＝写真［写真は省略］**、その中から節さんがぽっかりと顔を覗かせたそうだ。そして、瓦礫の下からは声帯が不自由なため声が出ない山西住職が助けを求めて何かを叩く音、義昭副住職の「この足さえ抜ければ…」という無念そうな声に交じり昭子坊守が「宏美と華奈ちゃんの声が聞こえない。二人を助けて」という悲痛な叫びが聞こえてきた。清子さんらは何とかみんなを救出しようと二人で力を合わせたがとても女性の力の叶うところではなく、近所の人達に助けを求めるとともに龍大生で京都に住む二男へ連絡をとり、東京に住む宏美さんの夫の茂夫さんへの連絡と救援を求めた。やがて、近所の人達や二男らも次々に応援に駆けつけ、山西住職らは次々に救出されたが、宏美さんと華奈ちゃんの母子は最後まで見つからず、発生から二十四時間以上経った十八日の夜にようやく発見された時には既に事切れていた。三十歳を過ぎてできた華奈ちゃんを宏美さんは日頃からとても可愛がっており、発見された時には華奈ちゃんをかばうように抱き抱えたままの姿で、長時間抱えられていた華奈ちゃんの顔の下半分は紫色に変色していたそうだ。二人の遺体は検死の後、尼崎市の清子さんの実家の慈眼寺に運ばれて葬儀が営まれ荼毘に付されたが、華奈

ちゃんを抱え続けた宏美さんの腕は曲がったままでいくら伸ばそうとしても元には戻らなかった。「納棺の時は宏美の腕の中に華奈ちゃんを抱かせて二人一緒の棺に入れてやりました…」－思い出すのも辛いのだろう、それまでは震災後の状況を詳しく語っていた清子さんは大粒の涙をこぼしていた
▽今回の阪神大震災で寺族二人と共に倒壊した庫裡の下敷きになり犠牲となった豊原大潤元総長（八六）＝西宮市西福寺前住職＝の宗門葬は、二月二十七日に本願寺会館で営まれることになった。また、幸子坊守（六二)､長女の真里さん（二八）の葬儀は二十一日に営まれた。

義援金の受け付けを開始

●高田派　本山専修寺（安藤光淵宗務総長）では現在、兵庫県南部地震の被災者への義援金を全国の寺院に呼びかけている。このほか宗務院に募金箱を設置し、義援金の受け付けを開始した。岩田光正総務は､「義援金は全国から寄せられていますが、ある程度集まったら届けようと思っています」と語っている。高田派の寺院は大阪に八ヵ寺ほどあるが、被害はなかったと。

実業

建物は無事だが仏壇に被害

●浜屋　兵庫県姫路に本社を置く浜屋(株)（浜田博邦社長）は兵庫・大阪・奈良の三府県に三十のチェーン店を持っているが、兵庫県南部地震で、兵庫県下の神戸本店、西宮店、尼崎店、新長田店、明石店と大阪府下の江坂店、池田店が被害を受けた。新長田店は、道路の向かい側にあったため、地震で発生した火災の難は免れた。神戸市中央区元町の神戸店は、建物は無事であったが、中に展示されていた仏壇の大半が倒れて壊れた。神戸市灘区に住む浜田社長は、地震が起こった日の十七日から神戸店に駆けつけて、各店と連絡をとるなど陣頭指揮を執っている。建物の損傷は伊丹店で少しあったが、チェーン店のうち倒壊した店が無かったのは不幸中の幸いであった。西宮市下大市東の西宮店は、百数十メートル西の国道171号線の高架が倒壊し通行止めになっているが、築七年の鉄骨三階建ての建物は殆ど無事であったものの、神戸店同様に中の仏壇の被害が大きかった。展示されていた仏壇百四十本は全て倒れ**＝写真［写真は省略］**、無傷で残った仏壇は、わずか五本程度であった。西宮店の鎌谷旬店長は、十八日、元町のマンションから車で、43号線を通り車で七時間かけて西宮店に着いた。それ以後は、大阪に住む同僚の家に泊まって、阪急電鉄で大阪経由で西宮店に通い、倒れた仏壇の後かたづけや、社内の掃除をしている。水とガスのライフラインに加えて、姫路、神戸方面からの道路がズタズタに遮断された西宮店は、同店の中で一番孤立しており、営業再開のメドは立っていない。それでも、鎌谷店長以下西宮店の社員は、毎日出勤し、神戸店からの指示に従って、同店の一日も早い営業再開の日に備えている。

法華

奥邨総長が被災地を訪問

●日蓮宗　十七日未明に発生した兵庫県南部地震は神戸市を中心に死者・行方不明者合わせて五千人を超える未曾有の大災害となったが、奥邨正寛宗務総長は十七日夜には大阪から神戸に向かい、十八日未明に現地に入って、兵庫県東部宗務所（神戸市中央区・本妙院＝大塚泰詮所長）を訪れ、情報収集とお見舞いを行なった
▽地震発生時、東京の宗務院第二庁舎にある宿舎に泊まっていた奥邨総長は、早速、宿舎から大阪の自坊・正蓮寺に電話を入れて寺族の無事を確認したものの、宗務院に登庁してから、テレビ等で一番被害が大きいと報道された神戸市を統轄する兵庫県東部宗務所（大塚泰詮所長）となかなか連絡が取れなかったため、この日一日、地震対策

に忙殺された。結局、緊急連絡網を使って、何とか兵庫県東部宗務所と連絡がとれ、大塚所長の無事は確認できたが、宗門寺院も相当被災しているものと想像されたことから、神戸市出身で、東京の宿舎では一緒に寝起きしている中井泰淳国際開教室長（灘区・本泉寺）とともに、何とか現地に入りたいと決断し、神戸に向かったというのである。何とか航空券を確保し、飛行機に飛び乗ったのが午後七時半すぎ。同九時に伊丹空港へ着いた奥邨総長らは、ここからタクシーで神戸に行こうとしたが、高速道路は不通になっており、また国道２号線や同43号線も大渋滞と交通規制でとても神戸まではたどり着けないと教えられたため、いったん、大阪・此花区の自坊（正蓮寺）に戻り、ここから自ら自家用車を運転して神戸をめざした。普段なら一時間ほどで行ける距離なのに、大混乱の中、交通規制や障害物に阻まれたり、また迂回しながらで、結局、四時間ほどかかって神戸市内に入り、兵庫県東部宗務所に着いたのはもう日付が変わった十八日の午前二時すぎであったという。現地の情報収集とお見舞いを行ない、再び、大阪の自坊に立ち寄った後、十八日中に東京（宗務院）に戻った奥邨総長は「現地は大混乱で惨憺たる状態でした。電気も消え、電話も通じないという有り様ですから、宗務所も努力しているものの、まだ管内寺院の全状況を掴みきれないというのが正直なところで、これがはっきりするまでにはもう少し時間がかかりそう。ただ東灘区の妙見寺をはじめ、神戸市内の寺院には相当の被害が出ていることは確かなようなので、早急に善後策を立てたい」と話しており、また「大塚所長のところ（本妙院）は現在、地元の避難所になっているほか、中井室長のところ（本泉寺）は遺体の安置所として使用されている」とのことであった。

地震対策本部を設置

▽奥邨総長が被災地を訪れていた十八日も、宗務院では地震対策の会議が連続して開かれ、夜遅くまで連絡や対応に追われていたが、同日には加賀美泰全庶務部長を本部長とする「兵庫県南部地震対策本部」の設置を決め、今後の対応や救援を行なっていくことになった
▽宗務院では十九日に、立教開宗七百五十年慶讃事業の具体的な内容を決める「実行委員会全体会議」が開催されたため、事務当局はこちらの準備と被災地への対応とで大忙しであった。

末寺の被害状況掌握へ

●日蓮本宗　十七日の兵庫県南部地震で、本山要法寺（京都市左京区）の開山堂の壁に亀裂が入った。また境内墓地の石灯籠五基が倒れ西門および薬医門の瓦が落ちた。末寺では大阪の寺院で一部、瓦が落ちたり、壁が落剥、石灯籠が倒壊するなどしたが、大きな被害は無かった。宗門では十九日、役員が要法寺に集まって今後の対応を協議し、地震による被害状況を各末寺から文書で報告させることなどを決めた。

真言

新居総長の自坊も倒壊

●高野山　宗団は地震当日すぐに上局会を開いて対応策を検討、各部長が班長となり四班に分かれて各地域の見舞いと調査を行なっている
▽新居祐政宗務総長の自坊・光明院（神戸市兵庫区吉田町三ノ五ノ二）も山門・地蔵堂・鐘楼堂が全壊、本堂・庫裡も半壊で今にも崩れそうな状態。幸い鉄筋で建てられた信徒会館が無傷だった。新居宗務総長は十八日に、葛西光義山林部長や職員二人などとともに和歌山の箕島港から小型漁船をチャーターして兵庫港に何とかたどり着いた。二十一日に光明院で新居宗務総長から直接話を聞くことができたが、その時の話によると「前日まで自坊に居たのでふとんがそのままの状態だったが、地震の後で部屋を見てみると、重い本がぎっしりつまった本箱が自分の

枕の位置に倒れていた。もしそこで寝ていたらだめだったろう」。また「本堂を早く完全に崩さないと、倒れて近隣の住居に被害が及ぶ」と自坊の撤去作業を一区切りしてから高野山に戻るという。すでに、職員を伴い、見舞いと調査のため近隣の寺院を十ヵ寺ほどまわっているようだ。これまでの情報を総合すると､｢今の段階で分かっている範囲では、全壊してしかも類焼で丸焼けとなった理性院（神戸市東灘区御影石町五ノ一ノ四）と弘誠寺（神戸市須磨区戎町五ノ一ノ四）が一番ひどいようだ｣。｢私自身もこの目で被災状況を見て、初めて想像を絶する被害だったことを認識した。テレビだけでは伝わらない部分がある。だから本当に全国の寺院の皆さんには大変な状況であることを認識してもらいたい。今こそお大師さんの“済世利人”の精神を発揮する時だ」と被災地以外の寺に積極的な援助を呼びかけている。

「御修法」の意味は？

●智山派　国家安穏を祈願する「御修法」結願の三日後に起きた兵庫県南部地震。宗務庁は、二十一、二十二の土日の休みを挟んだ二十三日、ようやく動きを開始、仏青、寺庭婦人、遍照講など宗派の諸団体挙げて募金を呼びかけるという姿勢を打ち出した。出遅れた感は否めない。

寺に身元不明の遺体安置

●須磨寺派　兵庫県南部地震の悲惨な状況が次々と明らかになっている。大本山須磨寺（小池義人管長）のある神戸市須磨区須磨寺町界わいは、被災後しばらくの間、電話も不通となりその状況が心配されていたが、須磨寺本堂は幸いなことに大きな被害を受けていなかった。しかし、塔頭三ヵ寺（正覚院、蓮生院、桜寿院）は半壊若しくは全壊の状態で、特に蓮生院の富永龍心住職は、本堂が倒壊し、全山あげての救助の甲斐なく死亡した。このように多大な被害を受けた須磨寺だが、本坊書院に身元不明の遺体を安置するなど地域に寺を開放している。また、小池管長はじめ塔頭の住職らは二十日と二十二日に須磨区民センターで営まれた合同慰霊祭にも出仕し、亡くなった人達の冥福を祈った。小池管長は「檀家や信者さんも多く亡くなられましたが、復興に向けて頑張る」と語った。

全山あげて復興へ

●中山寺派　宝塚市の大本山中山寺（石堂恵教長老）では今回の兵庫県南部地震で絵馬堂や五百羅漢堂などが全壊したが、山門や本堂は大きな被害を受けなかった。ところが、参道両脇に並んでいる塔頭四ヵ寺（成就院、華蔵院、総持院、宝蔵院）は軒並み塀が倒れ、また本坊が傾いたり全壊した。しかし、被災後直ちに全山あげて復興へ向けて歩みだした。また、水の蓄えがあったため、市民に水の供給を行ない、炊き出しも実施した。倒壊現場の陣頭指揮をとっている村主康瑞総務部長は「建物には被害があったが、山内の全員が無事だったのは観音さまのおかげ。寺の復興が地域の皆さまの安心にもつながるので、落ち込んではいられない」と力強く話している。

高松部長ら現地へ見舞い

●御室派　同派では今回の大地震で特に被害の大きかった兵庫区、長田区をはじめ、兵庫県全域の被害のあった地域へ役職員を派遣した。チーフは地元兵庫県出身の高松龍暉教学部長。高松部長は十九日から連日、職員とともに電車、車、徒歩などで被災寺院の激励を行なうとともに被災状況を視察している。また、本山宗務所に総務部災害対策係を設置、援助活動を開始した。まず手始めに、全末寺に向けて義援金を募っている
▽二十二日までに確認のとれた被災寺院の状況は次の通り（括弧内は被害状況）。西宮市・神呪寺（本堂半壊、ほか多数の建物半壊、全壊）、神戸市西区・宝珠寺（土塀半壊、本堂屋根瓦全損、石造物倒壊)､西区・長福寺（土塀

屋根半損、石造物倒壊)、伊丹市・金剛院（愛染堂半壊、山門と塀全壊、石造物倒壊)、伊丹市・安楽院（参集殿半壊、天井抜ける、塀全壊、石造物倒壊)、伊丹市・大空寺（本堂・山門半壊、鐘楼全壊、燈籠倒壊、観音堂傾斜)、川西市・常福寺（塀落下と亀裂)、尼崎市・法園寺（庫裡全壊、石造物倒壊)、明石市・宝林寺（本堂亀裂、屋根瓦全損)、兵庫区・東山寺（本堂・庫裡に被害があるが、比較的軽微)、長田区・大聖寺（屋根瓦・壁の破損)、長田区・大日寺（本堂裏亀裂甚大)、長田区・法隆寺（本堂・庫裡全壊、住職は瓦礫中から脱出)、長田区・朝光寺（本堂・庫裡全壊)、三木市・金剛寺（本坊損壊、建物傾斜）。

岡山

自布団と青年会が托鉢

●高野山真言宗　岡山県西部に百六の寺院を有する高野山真言宗備中宗務支所（小田仔賢宗務支所長、倉敷市二子一〇〇〇、利生院内）は、二十一日、「兵庫県南部地震義援金托鉢」を行なった。この托鉢は同支所下の自治布教団（高橋智運団長）と青年教師会（片岡良仁会長）が呼びかけて実施したもの。午後一時に倉敷市阿知三ノ二〇ノ一〇、高野山倉敷別院（松井大円住職）へ集合し、ＪＲ倉敷駅前を中心に市街地で托鉢を行なった。自治布教団の高橋団長は、「多くの寺院の方々に参加していただき、被災地の人々にこの真心を届けたい」と話していた。

念法眞教

神戸念法寺救援に奔走

●兵庫県南部地震の震源地が淡路島であることが報じられた直後に、洲本市の淡路念法寺（磯村良俊住職）から、取りあえずは無事であるという連絡があった。また、神戸市兵庫区駅前通の神戸念法寺（田幸和夫住職）についても無事の連絡が入ったが、同寺の信者は二万人ということで、住職らは手分けして調査、慰問に奔走している。二十一日現在では、詳しい報告が教団本部には来ていないようだ。教団では、災害救援募金を、各地寺院、各教会に呼びかけている。

浄土

寺院災害特別互助規程を

●浄土宗　十七日に発生した兵庫県南部地震は兵庫教区の浄土宗寺院に深刻な打撃を与えている。灘組の伊藤省三住職が倒壊した建物の下敷きになり死亡したほか、神戸組、灘組、武崎組、伊丹組、摂陽東組などを中心に多くの寺院で本堂全壊、半壊、庫裡崩壊、山門崩壊などの被害に見舞われた
▽成田有恒宗務総長は、兵庫県南部地震の被害に対する今後の対策として、「浄土宗災害救援義捐金から五千万円程度を拠出し、兵庫県の災害対策本部に届けたいと思っている」との考えを明らかにした。また、宗内寺院への救援策については、「浄土宗災害対策規程（宗規第一〇一号）を適用し、近く宗内各寺院に義捐金を要請したい」と述べるとともに、「浄土宗寺院災害特別互助規程（宗規第一一号）も適用したい」との考えを示し、「三月の定期宗議会には同規程に基づく臨時宗費賦課金を提案したい」と述べた。さらに「両規程に合わせて、浄土宗共催会規程も適用されるので、被災寺院の救済には、以上の三つの規程を柱として救援活動に取り組みたい」としている
▽浄土宗では災害対策規程に基づき、十八日に災害対策本部をいち早く宗務庁内に設置。宗内寺院の被災状況の把握に努めるとともに、緊急措置として、既に十九日には総本山知恩院と共同で、タオル一万五千本、カップラーメン五千個、飲料水一・五リットル入り七百五十本などの救援物資をトラック三台に積んで西宮市役所に届けた。二

十一日には兵庫教区に設置された同教区災害対策本部（東光寺＝尼崎市大庄北二ノ七ノ一）の要請を受けて宗務庁職員、知恩院職員ら二十五人がポリタンク二百個を同対策本部に届けた。また二十三日には宗務庁と知恩院が、百万円の義捐金を兵庫県対策本部に届けるなど、緊急支援活動を展開している
▽全国浄土宗青年会（神田真晃会長）でも十八日、地震被害への対応を協議。募金活動、ボランティア派遣の両面で救援活動に乗り出すことを決めた。同青年会では具体的な救援活動については近畿ブロック浄青（塩竈義明会長）に委託し、同ブロックの活動を支援していくとしている。また、取りあえず同青年会が独自に基金として設けている災害義捐金から五十万円を拠出。十九日には神戸市の地震対策本部に届けた。全浄青から救援活動の委託を受けた近畿ブロック浄青では大阪浄青の山本典雄会長の自坊・法伝寺に近畿ブロックの対策本部を設置。十九日には京都浄青の小林会長らが神戸市の被災地に入り、被害状況を視察するとともに、神戸市役所で浄土宗青年会名でボランティア名簿に二十人から三十人を登録した。二十日には大阪浄青、京都浄青が協力して救援物資を被災地に輸送。道路、鉄道などの交通手段が分断されていることから、比較的被害の軽かった尼崎市の常楽寺（浦上博隆住職）を前進基地として、同寺に救援物資を集結。大阪浄青のバイク部隊が各地の被災地に救援物資を届けた。

被災の中救援活動に全力

▽被災寺院の状況では、新幹線新神戸駅に近い神戸市中央区の東極楽寺（小林憲雄住職）は、周辺地域の住宅やビルなどの倒壊の被害は比較的少なく、同寺でも庫裡、信徒会館などは無事だったが、本堂は瓦が全部落下、塀の一部も崩れた。寺族も無事だった。本堂には心配される雨に備えてビニールシートを架けるなど応急措置に当たったほか、無事だった信徒会館に被災者を収容、救援に当たった。小林住職も「お米や水など生活物資も兵庫県内の親戚などから届けてもらったので、当面はやっていける」と元気な声。電気も復旧し、二十一日には水道もテスト給水が行なわれ、ライフラインは次第に回復に向かいつつある
▽同じく中央区北野町の浄福寺（浅野正運住職）も、被害は軽微にとどまった。本堂、庫裡など建物が無事だったことから、遺体安置所として使用、浅野住職は次々と運ばれる遺体と遺族の応対に追われた
▽須磨区堀池町の西極楽寺（牛田隆教住職）は本堂が全壊し、庫裡の内部が壊滅した。牛田住職は､｢本堂は四十年かけて復興したのに…」と悲痛な面もち。また、庫裡は大きな余震が発生すると倒壊する恐れがあるという。このような中、同寺に約十体の遺体が安置されているのをはじめ、牛田住職は被災民の救済活動に全力を挙げている
▽灘区の被害も大きく、同区篠原中町にある慶光寺（入井俊明住職）では、柱が折れて本堂が傾いたほか、山門も倒壊。墓地はほとんどの墓石が倒壊し、境内には地割れが走り、地震のすごさを物語っていた。入井住職も「本堂は柱が折れているので、このまま修理を施すのは困難だろう。解体しなければならないだろう」と話しながら、かろうじて倒壊だけは免れた本堂で、取りあえず仏具や荘厳の整理に当たった
▽灘区御影町の中勝寺（藤井大俊住職）もダメージは大きく、最近瓦を葺き替えたという本堂、山門がともに全壊。真新しい瓦が境内に散乱し、庫裡も半壊するなど痛々しい姿を見せていた
▽大きな被害に見舞われた芦屋市にある安楽寺（曽和義雄住職）は、海に近い南部に比べて比較的被害は少なかった。山門が倒壊したものの、鉄筋コンクリートの本堂は無事。庫裡もひびが入るなどの損傷は受けたものの比較的被害は軽微だった。寺族も無事。水道、ガスなどは断たれたままだが、二十日になってようやく電気が通るようになった。曽和住職も、帰る家すら失った檀信徒死亡者の位牌を迎えるため、取りあえず混乱した本堂の荘厳から整理に当たった｡｢約二十人の檀信徒が亡くなっている。何人の檀信徒の位牌が持ち込まれるか分からない」と述べるとともに「教区として今は何から手をつけていいか分からない状態。ともかく、これだけの寺院が被害を受けているのだから、個々の寺院でそれぞれ対策を講じるというのではなく、手を取り合いながら復興していくしかないだろう」と話していた
▽大阪府池田市西本町の寿命寺（岡村覚生住職）は兵庫県に隣接し、大阪府内で最も被害の大きかった寺院の一つ。本堂は倒壊し、山門は屋根瓦が落下。しかし、本尊は無事だったことが分かり、岡村住職は悲しみの中にも安

堵の表情をみせていた。現在、寺族と懸命に復旧作業に取り組んでいる
▽同寺は貴重な宝物類が保存されていることでも知られ、楠木正成、足利尊氏、武田信玄などの手紙をはじめ、行基菩薩の絵伝などがある。岡村住職は「宝物類は万一に備えて分散していましたので、損傷を受けずに済みました」と語っていた
▽同じく池田市の西光寺（細井光道住職）でも本堂の壁が落ちたほか、東門が倒壊。鐘楼堂の礎石が崩れ、観音堂の屋根瓦が落ちた。墓石も約五十基倒れた
▽大阪市中央区上本町西専念寺（松中実有住職）も燈籠が倒れた。

(c) 1995中外日報社(デジタル化：神戸大学附属図書館)